モン難民の異文化適応に関する定性調査の試み

乾　　美　紀*

I．はじめに

代表的な移民国家であるアメリカは、ベトナム戦争を通じて多数のインドシナ難民を受入れてきた。ここでとりあげるモン難民もインドシナ難民の一部である。モンは本来ラオスの山岳地帯に住む少数民族であったが、ベトナム戦争中、秘密裏にアメリカ軍に傭兵として雇われ、特殊部隊として利用されることになった。しかし戦後に発足した社会主義政権、パテートラオにより迫害を受け、難民として世界中に散在することを余儀なくされたのである。これに対してアメリカ政府は生活保護などの優遇処置を与えた上でモン難民の移住を受け入れたため、1980年初期より次第にその数が増え、現在全米各地に約12万人が定住している[1]（乾、1998）。

本研究でモン難民をとりあげた理由は、彼らが移住以来、他の移民に比べてアメリカへの適応が遅いと指摘されてきたことが挙げられる（Cerhan, 1990）。その背景には、モンが未就学の児童を含む大家族で入国し、就業が必要な成人は祖国で農業と戦役に従事した他は、過去に職業についた経験は殆どなかったという事実が存在する（小泉、1998）。また、モンの難民化に関する報道はほとんどなされなかったため、突然コミュニティーに出現したモン難民に、ホスト社会の好奇心が集まった。このように、モンの移民や適応形態は、これまで移民研究の対象とされてきた他のグ

* 神戸大学大学院国際協力研究科学生
日本学術振興会　特別研究員

1）筆者は1992年から1995年までの３年間、アメリカ、ウィスコンシン州内の公立中高校にて教育実習生・インターン教師としてモン難民への教育援助に携わった。

ループと比較して非常に独特であるため、彼らの適応過程を調査し検討することは重要である。そのために、本研究では定性調査を通じて難民の適応という複雑な現象を明らかにしたい。

Ⅱ．本研究の意義と目的

(一)　異文化適応に関する先行研究

これまで、インドシナ難民を始め世界各国からの移民や難民の異文化適応に関する先行研究は主にアメリカにおいて多数なされてきた。その一例を挙げれば、難民がアメリカ社会に適応するための要因を解明する目的で、スターとロバーツがベトナム難民を調査対象とし、質問紙による調査を行っている(P.Starr & A.Roberts, 1985)。この結果、職業的地位が高く、英語を流暢に話し、経済的に独立している状況が適応に成功している要因であると報告されている。また、移民が始まって間もないモン難民が抱えた問題と彼らのニーズを探るためブルーダー (H.Bruder, 1983) が質問紙による調査を行ったが、彼らの適応を阻害する要因として英語力の不足、未就労、不適当な住居、衣類の不足が挙げられた。一方、モン難民に対するホスト社会住民の態度を調査したルーフルとロスの研究では、住民458人を調査対象とした電話インタビューが行われた。調査の結果、ホスト社会がモン難民を好意的に受け入れていることが明らかになったが、その理由はホスト側の白人社会が、少数派であるモン難民に対して優越感を持っているという自民族中心主義 (ethnocentrism) の考えからではなく、モンの経済力が向上しているためであると報告している (W.Ruefle & W.Ross, 1987)。つまり住民は、モン難民が定職を持ち、収入を得て経済的に独立しつつある現状を「適応」と見なしており、それ故に彼らを好意的に受け入れているのであった。

一方、異文化適応の世代間の差異に関する研究の一つとして、C. ヒルシュマン (Hirschman, 1994) は、アメリカで教育を受けた若年層の移民は、成人の移民よりも適応の問題が少ないと指摘している。それは、若年層の移民は、学校生活や友人達の交流を通じてアメリカの習慣及び文化を吸収するからである。

また、ゾウの報告によると、移民の子どもは一般的に、学校の仲間に溶け込むことによってアメリカの文化を取り入れ、アメリカ人としてのアイデンティティーも確立している (Zhou, 1997)。このことに関して箕浦 (1984) は、子供は生活空間が広がる度に自文化の中でも新しい世界に遭遇しているので、大人のように異文化と自文化との間に越え難い壁を感じないと述べている。つまり、移民の子どもは学校生活を通じて、異文化と自文化のアイデンティティーの調和を得ているの

である。

果たして、これらの先行研究で得られた知見がモン難民にも該当するであろうか。尚、モンの若年層の変化に関しては1994年に筆者が行った調査結果と比較し[2)]、モンの生徒の適応過程を読み取ることが可能である。

（二）　本研究の目的

以上のような先行研究により、移民や難民のアメリカ社会への適応過程が明らかにされてきてはいるが、調査対象に関してはホスト社会、あるいは移住者の一方に関してのみ調査しているものが多数を占めている。そのため、ホスト社会と移住者の両者の見解を同時に検討する視点が欠けていたと思われる。

また、調査の方法については、質問紙による調査が圧倒的に多く、いずれも統計的処理を用いた定量的な研究報告書にとどまっているのが現状である。しかし、異文化の適応過程については、これまで主流であった質問紙を用いた統計的分析手法（定量調査）では結果の理解に限界があるため、次に述べるような定性調査が有効だと考えられる。

本研究の目的は以上の点を念頭に置き、次の課題を明らかにすることである。第一に、モン難民がアメリカに移住してから経験した異文化不適応の具体的な要因は何であろうか。また、これらの要因に世代間の差異が存在するであろうか。もし存在すれば、調査対象の二世代間に表れた結果を比較することにより差異を明らかにする。第二に、モンはそれらの不適応要因を克服したと言えるか。彼らを取り巻くホスト社会の見解を明らかにすることを通じて、移民してから現在までモン難民がどのように変化したかを分析する。

Ⅲ．調査の概要

（一）　定性調査法

本研究では質問紙調査のみにとどまらず、客観性を持った参与観察、調査者自身が直接関わる面接によるデータ収集などが含まれる定性調査を用いて研究を進めていくことに意義がある。定性調査法とは、質問紙の調査結果等を統計処理し、算出された数字により考察に導く定量調査とは異なり、調査対象に深く関わることで問題の深層や複雑な現象を読み取り、理論に導いていく方法である。

本研究のテーマである異文化適応などの複雑な現象を分析するためには、当事者の主観的な状況の定義の解明が極めて重要である。なぜならば、「もし人が状況を真実であると決めれば、その状況は結果において真実である」ように、人間は客観的な状況に反応するだけではなく、その状況が持つ意味に対して反応するため、むしろ主観的な意味が人間の社会生活にとってより重要だと考えられるからである（マートン、1978）。また、人が一度状況に意味を付与すると、続いてなされる

2）1994年教育実習校の高校で、異文化適応に対する問題点を調査した結果、アメリカの学校、社会生活に対する不適応要因として次の三要因が挙げられた。
① 言語的要因－英語ができないことが大きな壁となって学校や学校外での生活になじめない。
② 文化的要因（カルチャーショック）－農耕社会から近代社会への移行に戸惑う。犯罪への不安。
③ 人種的要因－学校での他の生徒から差別を受ける。偏見の目で見られるのが不安。

行動の結果はこの意味によって規定される。したがって、本研究ではモン難民がアメリカ社会に適応したか否かに関して、モン難民及びホスト社会住民の主観的定義を中心に分析する。

定性調査によるデータの収集は通常次の三種類を混合させて行う（M.Patton, 1993)。

① 記録分析：質問紙による回答、先行研究や刊行物等からの情報を引用

② 面接法：質問紙上では把握できない状況を直接インタビューすることにより明らかにする。

③ 参与観察：調査対象が出席する学校や会合に参加した上で行動や変化を観察し、状況別に観察ノート（フィールドノート）をつける。

質問紙には調査対象の属性に関する項目の他、ラオスへの帰還問題についての項目も含まれていたが今回の研究で取り上げるのは主に以下の二点である。質問内容は調査対象によって異なるが、モンの住民に関しては①アメリカに移住した時、適応に関してどのような問題をかかえていたか　②具体的に、不適応の要因と思われたものはどんな点か、また、ホスト社会に関しては①モンが移民当時、どのような異文化適応の問題を持ったと推測できるか　②彼らがどのような変化を遂げたか、について答えを記述形式で回答を得た。

（二）　調査対象

モン難民の調査対象の選択に関しては、アメリカの移民期間が5年以上、8年未満の者に限った。モンの生徒は多数を調査対象とすることができたが、本研究ではそのうち、1994年に調査をした生徒でまだ高校に在籍しているモン難民の生徒のみに焦点を置いた。一方、ホスト社会の調査対象者はラクロスのモン援助団体や教会、学校区代表から紹介を受けた男女に依頼し合計47名を対象とした。尚、本研究の調査はウィスコンシン州ラクロス市において、1997年9月に行われた。

第一表．調査対象の属性

調査グループ	年齢	性別(男:女)	人数
① モン族世代Ⅰ	38–72	5：4	9
② モン族世代Ⅱ	15–19	5：5	10
③ ラクロス市居住者	30–62	6：4	10
④ ラクロス市学校区生徒	15–18	4：5	9
⑤ ラクロス市学校区教師	38–55	3：6	9
計			47名

（三）　分析方法

質問紙調査の回答、参与観察のフィールドノート、面接調査で録音された内容等のデータに対して、調査対象が異文化適応の問題を意識的に言及した部分を取り上げ、得られた結果を要因別に分類し、コードを付けることにより意味の構造を読み取る。その際、要因間の関係性を判定することも重要なプロセスである。また、データ分析と同時に過去の文献や諸情報を交えて解釈するプロセスから理論を同時に作り出すことが可能である（佐藤、1996)。定性調査の分析、調査報告の際には、分析者の恣意性が問題として指摘されるが、

「三角測量の手法（triangulation)」を使うことにより分析者の主観性をある程度排除することができる[3)]。

Ⅳ．調査の結果

（モンの世代ⅠとⅡ）

調査で得られたデータを分析した結果、モンのアメリカ社会への不適応要因として次のような点が挙げられた。第２表に示されたように、世代間に明らかな差異が表れている。

モンの世代Ⅰは言語、文化、経済、環境という問題を抱えていた事が明らかなった。特に言語、つまり英語の習得が困難であった事を指摘した調査対象が多く、アメリカで生きていくためには英語を操れなくては生活できないという意見が圧倒的であった。また、自給自足が常であった農耕社会から、商品が揃うスーパーで現金や小切手を使用して買い物をする生活に慣れるまでに時間がかかったことも不適応の要因として挙げられた。これには、モンが居住していたラオスの村では女性は家の中にいるべき存在であるため、村の外に出ることがほとんどなかったことが影響している。要因間の関係を見てみると、買い物や職業取得に関する問題は英語ができないことが原因として波及している問題だと考えられるため、これらの要因と言語要因との重複部分が大きく、相関関係は高いと思われる。

一方、文化に対する不適応問題もかなり多岐に渡っている。インタビューの結果、略奪結婚や子どもを叩いてしつけることはモンの文化や習慣の一つであるが、それらがアメリカの法律では認められないために誤解を多く招いたという問題が聞かれた。また、いざアメリカの文化を理解し尊重したとしても、現在では自文化を維持し、継承しなければならないという新たな問題や葛藤に直面している。これらの文化的葛藤についての代表的なコメントに関して、下記の事例１を参照されたい。

3）・investigator　triangulation：データ分析にバイアスが入らぬように他の研究者に協力を要請
・data triangulation：刊行物や新聞、面接の結果等さまざまなデータや情報源の適切な使用
・theory triangulation：取り扱う問題に対して多側面から解釈、定量的なデータも引用（Patton, 1993）

第二表．アメリカへの不適応要因

モン族世代Ⅰ	モン族世代Ⅱ
①　言語：ラオスでは教育機会に恵まれなかったため英語の習得が困難(9)	①　言語：英語が全く理解できなかったため学習自体が困難(10)
②　文化：食料品の購入や小切手の使用(6) 法律の理解、宗教（アニミズム）の存続 (4)　(3)	
③　経済：生活保護が不十分　職業取得が困難 (6)　(8)	
④　環境：冬の厳しい天候、自動車の運転（各４）	

（　）は回答人数
複数回答含む

事例1、移住して五年になるレストラン経営者のコメント

Speaking English was the main difficulty. It was hard to get a job because of that or...maybe because I am Hmong. I named my youngest son "Brian"–American name–to wish he will learn American way and his future employer will treat him as American. But our problem is... my oldest son is losing Hmong (language). When we came to this country, we troubled with understanding culture here, but now we focus more on maintaining our own traditions and culture (sic).

事例2、筆者が教育実習生として教えた19歳の生徒のコメント

Can you tell me what I wrote years ago? I can not remember....I picked only English problem because those problems (racial and cultural issues) was big, but temporary problems. You know, I had a lot of Hmong friends to share the same experience. Anyway, when I got out of ESL class, I was glad and confident. And...I felt like being special when I got a part-time job and earned salary like my American friends. Because I am Hmong, but also treated like American (sic).

また、環境への適応問題に関して強調した調査対象もいたが、これは、寒さが厳しく、車による移動が必要とされるウィスコンシン州ならではの指摘であったと思われ、州が異なれば問題になっていない可能性が高い。

次に世代ⅠとⅡの結果を比較してみる。表に示された通り、世代Ⅱは適応に関する問題が「言語」のみに限られており、そのために適応には世代Ⅰと比較して時間を要していなかったことが明らかである。しかし、ここで興味深い結果が得られた。世代Ⅱに対して約3年前、同一調査対象に同じ質問をしたにもかかわらず異なる回答を得たのである[2)]。これに関して、1994年に行った調査結果を見せながら問い直したところ、学生から次のようなコメントを得た。

このように、差別やカルチャーショックなどは、かつて主要な問題であったが、現在さほど気に留めることもなくなったため言及を控えている。これには移民当時、同じ境遇にある友人と励まし合いながらモンの意識を高めていた過去がうかがえた。それ以上に、アメリカでの生活に必要な英語の習得に苦労し、その上達を目指している。生徒たちは英語力が向上し、アメリカ人生徒と同じような学校生活を送ることができてから、学校生活も楽しくなったと変化を語った。

また、筆者がインフォーマルな状況下で尋ねた彼らの呼称（"How do you identify yourself?"）に対して、全ての生徒が「モン・アメリカン」と表現した。 特に、アメリカでの滞在年数が長く高学年になるほど迷いなく答える傾向が見られた。これらの生徒たちは、家ではモン語、学校では英語を話すというように二ヶ国語をうまく使い分けている特

徴がある。インタビューの事例２に見られるように、自分が「モン」であると当時に「アメリカン」であると認識した時を境に、自信やアイデンティティーが高まったという事実を読み取ることができた。このように、「モン」と「アメリカン」の二重のアイデンティティーの調整がうまくいく時に彼らが適応に成功していると言えるのではないだろうか。

一方、世代Ｉ、つまり大人のモンが自分たちを「モン・アメリカン」と表現している事例は見られず、自分たちを「モン」と称していた。彼らは次世代がアメリカ社会に適応する事を希望しながらも、モンのアイデンティティーを維持して欲しいという葛藤も感じている。このように、モン難民にとっても若ければ若いほど、アメリカに適応しており、難民や移民としてではなく自分自身を「モン・アメリカン」として捉えていることが明らかになった。

（ホスト社会の見解）

現在、地域のモン難民の大半が定職に就いている現状を踏まえ、ホスト社会の人々の見解は、彼らが移民当時と比較して地域での生活に慣れ、地域社会に適応しつつあるのではないかと言う点で一致していた。このようなモンの変化をホスト社会住民の調査対象は「彼らがアメリカナイズ（Americanize）した」と言う言葉で表現していた。特に、モン難民への援助を続けてきた人の次のようなコメントは、ホスト社会とモン難民の関係の変化を明確にしている。

事例３　地域の教会でモン難民への識字ボランティアリーダーを10数年続けている女性のコメント

The Hmong, particularly the kids are pretty much mainstreamed and changed to be more Americanized. The parents are to some extent. For the first time, some people in the community was against for them because they are afraid of the Hmong's taking jobs and making the school overcrowded. What I emphasized on our new volunteers was to forget such prejudice. Our volunteers and Hmong people had great communications to understand each other. Now, as a whole, the community has accepted them not as refugees but as new immigrants (sic).

尚、地域住民が考えるモン難民が乗り越えた問題と、彼らがどういう点で変化したかについて以下の四要因が指摘している。

① 経済：生活保護への依存が減少し、現在では地域の重要な労働力になっている。
② 教育：民族的に勤勉でまじめな性格なので、モンの生徒たちの成績が上昇した。
③ 文化と言語：英語力が上達しアメリカの習慣や文化を受容しはじめた。また、独自の文化を維持しながらも、アメリカの法律に理解を示すようになった。
④ 性格：特にモンの若年層の性格に変化が見られた。移民当初は控えめで保守的な印象を受けたが、学校生活で刺激を受けたためか、活発に自己主張する者が増えた。

これら、四つの要因の指摘は、表2で示した「モン難民に表われた不適応要因」と一点を除いて類似している。地域住民自身は厳しい気候に慣れており当然だと受け止めているため、モン難民が気候への不適応を示したなど想像できなかったと言える。また、地域住民が、モンの熟年層の性格が変化したと指摘していることに関しては、モン自身が意識していない変化であると推測できる。

（教師や生徒の見解）

ラクロス市学校区の教師は、モン生徒の学力が向上してきたことや、ESL教室（English As a Second Language）で英語を集中的に学習する生徒数が減少した現状を指して、特に移民から時間が経った生徒ほど、学校や地域社会で問題なく生活していると指摘している。また1995年、タイのモン難民キャンプの閉鎖に伴い実質上の移民が終了したため、地域の二高校にあったESL教室を併合したという事実もあり、学校区がモンの生徒に対して抱える問題も減少していると言える。不登校が多かったモンの女生徒に対しては、ESLの教師はじめ学校全体が彼らのニーズに適合したカリキュラムを設立するなどの問題解決がなされたようである。学校側が行ってきたモンへの配慮とモンの生徒の変化について、ESL教師のコメントを以下に抜粋しておく。

事例4　高校のESLで15年に渡り、モンの英語教育に携わってきた女性教員のコメント

I think the Hmong students have adjusted enough. At first, their customs such as early marriage and pregnancy confused us. As the girls were too reluctant to attend school, we organized special curriculums for their credits. Of course, this is for other female students, too. Now, gym program for pregnant girls and parenting program are popular among them because these subjects are useful to them. They enjoy American style school life with maintaining Hmong culture (sic).

一方、学校区の生徒たちの見解はモンの生徒に関して無関心なものが多かった。特に、低学年になるほどモンの仲間に対する誤解や偏見が見られた。地域の生徒たちがモン難民の背景に関して無知なまま、共に学校生活を送っている様子がインタビューで明らかになった。ここで、調査対象ではなかったが、モンの生徒が多く通う小学校を参与観察した際にアメリカ人生徒にインタビューをした結果を紹介する。

事例5　小学4年生の女生徒にインタビューを試みた時のコメント

Yes, I know Hmong, I think they are from somewhere in Wisconsin because they speak English. But they eat dogs, you know. I used to... but we don't play with them often. Why? They also speak language which I don t understand and they usually stick together. Sometimes they speak Hmong to us. (sic)

このインタビューを行ったフランクリン小

学校ではモンの生徒が三分の一を占めるが、教師が低学年の授業でモンの歴史や文化背景について教えることがほとんどない。高学年になり、移民の歴史や東南アジアの地理を学習する過程になった時に初めて、身近な移民の話題としてモンの背景をごく簡単に説明する方針であった。このように、小学校では特にモンに関して教えてはいないが、その代わりに「Multi-cultural Day（多文化の日）」を特別に設定し、モン生徒の保護者にも協力を依頼して、伝統衣装や料理を紹介する行事を行っていることが確認できた。

また、調査対象の学年が高くなるになるほど、モンの友人を持ったりモンに対する関心を持つ生徒が少なかった。高校生、大学生に「モン難民がアメリカに移民した背景やその理由」について尋ねた質問の回答は以下の様であった。

- I really don't know.
- They escaped religious prosecution.
- I don't know. Maybe because they needed freedom which they did not have in Laos.
- They were invited here because of some broken promise made by US government .. not sure.
- They came here for better life (sic).

このように、どの調査対象からもモンとベトナム戦争の関連性を的確に述べた回答を得ることができなかった。彼らはモンがベトナム戦争によって移住せざるを得なかった歴史的事実を知らないか誤解をしているのである。また、モンに関する質問に対してコメントを控えたり質問紙を空白のままにしている生徒も少なからずいた。調査結果に表れた生徒たちのこのような誤解や無関心が、モン難民の不適応にも影響を与えてきたと思われる。

Ⅴ．まとめと考察

本研究の結果、モンが徐々にアメリカへの適応を果たしつつあり、「難民」ではなく「移民」として地域に受け入れられるように変化したことが明らかになった。また、調査対象の全てがアメリカに移民して五年以上経過しているためか、アメリカでの生活に慣れ、現在の暮らしを快適だとも感じている。本稿では触れなかったが、アメリカ社会への適応過程には関係なく、故国ラオスには帰還する意志を見せるものはいなかった[4]。これは、米軍に加担したモンはラオスで政治犯扱いになるため、再度迫害を受ける恐れがあることやラオスの農耕社会や衛生に欠ける生活に再適応することが不可能だと言う二つの理由が主であった（Inui, 1998）。

また、異文化への適応に関しては、モンの世代間に明らかな差異が見られた。子供たちは全体的にアメリカでの生活に慣れ、学校生活でも以前より問題が減少したが、英語力にまだ自信がないことが本人たちにより指摘さ

4）モン難民の帰還問題に関しては、第19回、異文化間教育学会（モン族難民と Americanization）及び拙稿 "Assimilation and Repatriation Conflicts of the Hmong Refugees in a Wisconsin Community" において報告済みのため参考にされたい。

れていた。生徒の学力低迷の問題を指摘した教師もいたが、モンは勤勉な性格を持っているので英語力の向上次第でそのような問題は解決されると推察できる。近年では、モンの生徒がアルバイトを始めるなどして積極的に学校外の地域で活躍している事実も参与観察の結果明らかになった。このように、モンがアメリカを新しい生活の地として受け止め、「モン・アメリカン」としてアメリカ社会で生きていく姿勢も読み取る事ができた。特に、若い世代にこの傾向が見られたため、モンを例にとってみても、学校に通って文化的刺激を受ける子どもの方が社会への適応が早く、（モン）アメリカンとしてのアイデンティティーを築き上げていることが明らかになった。

このように本研究で行った定性調査の結果、モンとアメリカンの二重のアイデンティティーがうまく噛み合い、調和がとれている状態が適応に成功しているということが導き出された。多文化社会における適応とは、このようにアイデンティティーのバランスがとれていることが重要だと思われる。また、ホスト社会が彼らを「アメリカナイズした」という状況の定義をしていることも、モンがアメリカ社会での適応を果たしていることの一因であると言える。

しかしながら、今後、他の移民が経験したように、モンの子弟たちも自文化の維持とアメリカへの同化の中で葛藤が高まると思われる。現に、モン語しか話せない自分の祖父母とコミュニケーションができないというケースがあり、それが家族間の葛藤を生みだしているようである。アメリカで生きる限り、他のアメリカ人と同じように英語を話し、アメリカ人として生活の基盤を整えることが必要とされるだろうが、そのような状況においても、彼らがモンとしてのアイデンティティーを守り、次世代に彼ら自身の文化を継承していくことを期待したい。

尚、本調査により、アメリカ人の生徒のモンに対する意識が大変低いことが明らかになった。ホスト社会住民と移民してきた人々が共存することが重要であるのにもかかわらず、住民側に偏見が持たれていれば共存が望めない上、移住者にも葛藤が生じる。このような事実は、モンがアメリカ社会への適応に時間を要していたことの一因となっていたと考えられる。言うまでもなく、適応にはモン自身の歴史観、人生観などのアイデンティティーも大きく影響しているであろうが、仮に、ホスト社会側に異文化を受け入れる積極的な姿勢や基盤が整っていれば、適応段階がさらに円滑であったと推測できるため、ホスト社会の理解も大変重要な要素だと思われた。このように、定性調査による研究の結果、定量調査とは異なるさまざまな側面から見た状況の定義が明確になった。

しかし、本研究での調査にはさらに深く考察すべき点もいくつか残る。確かに、学校における適応の調査に関しては第一段階の結果を得る事ができたが、手法上に問題があったためか、職業上の問題を深く追及するまでには至らなかった。先行研究が指摘してきたように、移民や難民の職業取得は、経済的な自

立つまり社会生活への適応と関連が高いと思われるため、今後はこの点に関して深く追求していきたい。

また、モン難民の次世代、つまり三世が現れつつあるため、彼らのアイデンティティーの問題を探る調査を試みることも重要である。さらに、今後はモン難民だけに焦点を置いた調査を続けるのではなく、数多く定住しているベトナム難民との比較を深めるなど、他の移民に関しても調査を行っていきたい。このような課題を遂行してこそ、最終的な結論が討議されるべきだと思われる。

引用文献

H.V. Bruder, "A Census and Basic Needs Survey of the Hmong Population of La Crosse", Unpublished Master's Seminar Paper. University of Wisconsin-La Crosse. (1985).

J.U. Cerhan, "The Hmong in the United States : An Overview for Mental Health Professionals", Journal of Counseling Development, vol. 69, No. 1 (1990), pp. 88 - 92.

C. Hirschman, "Problems and Prospects of Studying Immigrant Adaptation from the 1990 Population Census : From Generational Comparisons to the Process of Becoming Americans", International Migration Review, vol. 28, No. 4 (1997), pp. 690 - 713.

M. Inui, "Assimilation and Repatriation Conflicts of the Hmong Refugees in a Wisconsin Community : A Qualitative Study of Five Local Groups", Migration World, vol. 26, No. 4 (1998), pp. 26 - 28.

W. Ruefle, & W. Ross, "Attitude toward Southeast Asian Immigrant in a Wisconsin Community", International Migration Review, vol. 26, No. 3 (1987), pp. 877 - 898.

M.Q. Patton, Qualitative Evaluation And Research Methods, California : Sage Publications, 1990, p. 10.

P.D. Star, & A.E. Roberts, "Community Structure and Vietnamese Refugee Adaptation : The Significance of Context," International Migration Review, vol. 16, No. 3 (1985), pp. 595 - 615.

M. Zhou, "Growing Up Americans : The Challenge Confronting Immigrant Children and Children of Immigrant", Annual Review of Sociology, Vol. 23 (1997), pp. 63 - 95.

乾　美紀「故郷をうしなったモン族」,季刊民族学（国立民族学博物館監修),第22巻第2号　通巻84号，1998年4月，104－109ページ。

小泉康一「文化差異の管理」,片岡弘次編『少数民族の生活と文化』未来社，1997年11月，178～237ページ。

佐藤郁哉「社会科学における定性／定量の区分についての覚え書き」,一橋大学編『一橋論叢』,第115巻　第5号，1996年，139～156ページ。

箕浦康子『子供の異文化体験―人格形成の心理人類学的研究』,思索社，1994年，100ページ。

マートン　ロバート『社会理論と社会構造』,みすず書房，1978年，382～384ページ。

A Qualitative Research of the Hmong Refugee's Intercultural Adaptation

Miki INUI *

Abstracts

After the Vietnam War, the United States has accepted a number of Indochina refugees include Hmong from Laos. However, the Hmong have had a difficult time adjusting to the life in the United States.

The first objective in this research is to identify adjustment problems of the Hmong population by exploring their intergenerational difference. The second objective is to examine how the community's perspective toward the Hmong has been changed since their immigration.

The research samples consist of five groups made up of people involved in Hmong's resettlement. Data was gathered by the qualitative method, includes written documents, interviews, participatory observation in classes and community activities.

The results show Hmong Generation 1 and 2 were found to differ significantly in adjustment : Generation 2 had fewer problems compared to Generation 1, so that they adjusted to the US relatively more quickly and easily. Besides, Generation 2 has a tendency to call themselves "Hmong-Americans". The interview results suggest that their adjustment became successful when they could handle with double identities (Hmong and America).

As a whole, the community residents and teachers recognize the Hmong have adjusted well to the community and become "Americanized", especially the younger ones.

* Graduate Student, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.
Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science.

However, the local student's recognition and understanding of the Hmong was poor--- they do not understand correctly their historical background nor immigration reason--- which may have restricted the Hmong's adjustment.

Further research should more focus on Hmong occupational issues as well as assimilation of Hmong Generation 3. Moreover, other refugees such as Vietnamese refugees resettlement and assimilation problems can be compared with those of Hmong.